

幕末・明治期、高山郷の指導者

宇都宮東太について

上園正人



【高山郷土誌（昭和41年）】より

幕末・明治期、高山郷の指導者

宇都宮東太について

上園正人

はじめに

宇都宮東太撰文の墓碑や顕彰碑を見て回っている。その時、常に宇都宮の果した役割・存在の大きさを強く認識させられる。なお、碑文は宇都宮正直の名で撰せられているが、今回、人口に膾炙している「宇都宮東太」と表記することにする。

宇都宮はさまざまの面を持った人物である。『高山郷土誌』は、宇都宮を儒学者・国学者にして強固な尊王心の持ち主で、「常に郷の最高の支配者であり責任ある地位にあった」人物と見ている。今回はわずかに、東太の略伝および郷土誌などでも取り上げられている教育者としての面と神道家・国学者としての面について紹介することにした。そして最後に、本題から外れるが「宇都宮東太頌徳碑」の撰者二宮成についてごくごく簡単に紹介することにした。

一 宇都宮東太略伝

まず宇都宮東太（正直）の生涯を郷土誌等に依拠して簡単にみておくことにする。宇都宮東太、名は正直、字は子康、幼称は東蔵、初め快通、快哉といい、修験道に入り連正院と称す（のち還俗）。通称は東太。

文政元年（一八一八）三月三日、生まれる。父は修験者の東学院快孝、母は守屋弾正良易の女辰子。幼にして句説を家庭に受ける。年十四にして伊東佳太郎（藩の農政を厳しく批判し、現状に基づいた対策を建言した『感傷雜記』の著者として知られる）の門に入る。また、いずれも時期は不明ながら、鹿兒島の矢野氏に書信を以て師事し、ついで山田鼎斎（有裕）に師事する。また、詩を鹿兒島の清川召浦に、和歌を鹿兒島の桂園派の山口利雄に、兵法を甲州流の園田氏に、活花を奥氏に、礼を小笠原流の坂元氏に、御を鎌倉流の川上氏に、射を日置流の伊集院氏に、銃を稻留流の和田氏に、鎌を天真流の加藤氏に、さらに日高氏に学んだ。文武にわたり、きわめて多才の人であった。

天保十二年（一八四一）七月、口事方となる。

天保十三年（一八四二）三月、横目助となるも、疾を以てこれを辞す。七月、口事方を辞す。

天保十四年（一八四三）夏、家業を継ぎ、修験道修行のため

和州大峯に登る。これは秀村選三氏の「大隅国高山郷土宇都宮家の「年譜」が紹介している宇都宮の日記（年譜）中に記されている。しかし安藤保氏に拠れば、それはあくまでも伝聞にすぎず、ただ、この年、大和国吉野を訪れていることに「わずかに修行の痕跡をみることができるとのべておられる」。

弘化二年（一八四五）三月二十三日、師の伊東佳太郎祐伴が病没する。享年八十三。

弘化三年（一八四六）六月一日、父快孝死去。享年五十。父の跡を継ぐ。

弘化五年／嘉永元年（一八四八）正月、与頭助となる。二月、島津斉興巡見の際、応対に尽力したという。三月、与頭となる。この年、門弟であった是枝柳右衛門が谷山に帰る。是枝は後に勤皇派の志士として活動する。

嘉永六年（一八五三）三月、郷土年寄助となる。まもなく郷土年寄となるか。十一月、島津斉彬巡見の際に応対。

安政元年（一八五四）、波見川口普請係となる。

安政二年（一八五五）三月、国老新納駿河（久仰）巡回の際に
応対。

万延元年（一八六〇）五月六日、是枝柳右衛門が京都からの

帰途、高山に立ち寄り、宇都宮らに会う。

文久二年（一八六二）八月二十六日、守屋舎人らと共に江戸守衛のため出府。前日の二十五日、新納次郎九郎・和田先生（稻留流鉄砲師範）等より餞別を、山田鼎斎（造士館教授）より送別の詩を贈られる。九月五日、江戸の高輪御屋敷に到着。十月二十九日、島津斉彬の姫様（暉姫・寧姫）御下向につき御供。

文久三年（一八六三）正月、帰国。七月、薩英戦争の際、兵隊を率いて鹿児島に赴く。

慶応三年（一八六七）六月、暖役となる。十一月、東目総督島津兵庫（久宝）巡回の時、仮屋にて『大学』の三綱領（明明徳・親民・止至善のこと）の披講を命ぜられる。

慶応四年／明治元年（一八六八）八月、官に請いて還俗する。八月二日、子の多聞院（快明）、越後で戦死（十月九日、葬式）。八月十一日、高山を訪れた破寺方掛後醍院彦次郎（真柱）らに
応対する。九月、「送後醍院先生赴京詩並序」を撰する。

明治二年（一八六九）十月、小隊長となる。

明治四年（一八七一）六月、小隊長を辞職。この年、吟味役となる。

明治五年（一八七二）四月、三等里正兼戸長となる。

明治六年（一八七三）一月、高山・串良・内之浦三邑の副区長となる。二月、鹿屋・高山・内之浦・始良・高隈・串良・百引・市成・田代九邑の大区副長となる。五月、鹿屋郡治所大区副長となる。七月、教部省の山之内時習らの内之浦高屋山陵・始良・鶴戸山陵の見分に立ち会う。八月、大区副長を辞職。

明治八年（一八七五）、高山郷戸長役場高山郷校事務心添掛となる。九月、高山・串良・始良・鹿屋・内之浦学校二等監事となる。

明治十年（一八七七）、西南戦争勃発。宇都宮は尊王の立場から天皇親政を実現した明治政府を支持していたこともあり、西郷らの政府に向かつての挙兵に批判的で、高山の士の参加を食い止めようとしたが、食い止められず高山も私学校徒に應ずることになる。冬、学校二等監事を辞職。

明治十一年（一八七八）二月、戸長となる。

明治十二年（一八七九）五月六日、地租改正係顧問に任命される。十一月二十三日、田畑等級取調べのため岸良に巡回する。

明治十三年（一八八〇）二月、第一回県会議員に当選する。五月に古川清二の、六月に右田伝之丞政行の、九月に峯崎幸早

太の、十月に児玉小兵衛実純の、十一月に野村十次郎綱賀の墓碑を撰する。いずれも西南戦争で西郷方として参戦して戦死した者たちである。その他にも宇都宮は西南戦争戦没者たちの墓碑を撰している。

明治十四年（一八八一）三月、第二回県議会議員に当選する。

明治十五年（一八八二）三月、県会議員を辞職。六月、迫田孫次郎氏庸の墓碑を撰する。迫田は西南戦争で西郷方として戦死した。

明治十八年（一八八五）十二月、前年に亡くなった年下の友人日高敷仙（正業）の燈明台のために碑文を撰する。

明治十九年（一八八六）八月、野村伝之助の墓誌を撰する。野村伝之助は西南戦争で西郷方として参戦し、負傷して帰郷したが、その傷がもとで十八年に死去した。

明治二十年（一八八七）三月、「神宮寺跡記念碑」を撰する（現在、元々の碑は確認できず）。また、遥拝所碑を撰する。

明治二十一年（一八八八）八月、「東泊の漁場開拓の碑」（郷土誌の表記に従う）を撰する。東風泊漁場を開拓した竹之下伊兵衛を顕彰したものである。

明治二十二年（一八八九）六月、宇都宮は元治元年に流謫地

屋久島で病死した門人は枝柳右衛門の弟で嗣子の茂兵衛に宛てて「遺訓」を書き送る。これに先んじて柳右衛門の事蹟を調査して内奏する（これにより明治二十四年（一八九一）十二月、是枝柳右衛門に従四位が追贈された）。

明治二十五年（一八九二）五月、「謝恩記」を撰する。東串良の医師で教育者であった竹井玄隆の教え子たちに依頼されて撰した竹井氏顕彰の碑文である。七月、折田兼至・二宮成・後醍院良望（後醍院真柱の子）が宇都宮宅を訪う。

明治二十六年（一八九三）六月十七日、西郷菊次郎が宇都宮を訪う。同月、安庭貞温の墓碑を撰する。安庭は西南戦争に西郷方として参戦するが、病弱のため帰郷し、二十五年に病死している。

明治三十一年（一八九八）三月二十日、妻（柏原太次郎兵衛公富の女）死去。享年八十二。

明治三十七年（一九〇四）十月、伊東祐祥（明治三十五年没）の墓碑を撰する。祐祥は宇都宮の師伊東佳太郎の孫。

明治三十八年（一九〇五）二月、師の「伊東佳太郎先生墓碑」を撰する。十二月、山之内種幸の墓碑を撰する。山之内は、地元政治家として活躍した人物である。

明治三十九年（一九〇六）二月十七日、死去。享年八十九。

明治四十一年（一九〇八）四月中旬、二宮成が「宇都宮東太先生頌徳碑」を撰する。十二月、頌徳碑建設竣工奉告祭が举行される。

二 教育者としての宇都宮東太

宇都宮東太といえば、まず教育者としての像が思い浮かぶ。宇都宮は明治期に地域の行政官として公的学校教育に関与しているが、その一方で幕末期から私的教育も行っていた。この点に関しては郷土誌等々で取り上げられている。それらを参照しつつ、特に私的教育者としての宇都宮東太について簡単にのべてみたい。

平成九年版『高山郷土誌』は竹之井敏氏の論考「江戸末期における高山郷の手習い」（『大隅』第二十二号）を参考にして高山塾について紹介し、宇都宮家の古い屏風の下張りの中から見つかった書が「文化十二年（一八一五）の書であることが判明しており、多くの塾生が東太を慕って学んでいたことがわかる」とのべている。しかし宇都宮東太が生まれたのはそれより後の文政元年（一八一八）であるので、見つかった書は東太の時代のものではない。紹介されている手習いの清書は十歳から二十四歳までの者たちのものであるという。父快孝は寛政九年生まれであるから、文化十二年は十八九歳頃で、年上の

者もいる塾で教えるには若干若いように思う。さらにその前の祖父快意（時に四十一、二歳くらいで、郷士年寄であった）の時代のものであるうか。いずれにしても、宇都宮家が文化十二年頃にはすでに私塾を開いていたことは明らかであろう。そして、東太は祖父、あるいは父が開いていた家塾である高山塾を受け継いだことになるのではないだろうか。

宇都宮東太の私塾で学んだ者には「武士の子弟のみでなく農工商家の子弟も含まれている」だけでなく、高山郷以外からの門人もあったという。ただ、竹之井敏氏は「江戸末期といっても、明治の維新の直前からのことで、教育が一般庶民に普及するのには、厚い壁があったことが考えられる」とのべておられる。

高山以外からの門人の例として、『内之浦町誌』に依拠して紹介してみよう。明治初めのこと、内之浦の麓馬場の士族の子弟たちが、高山の波見までは舟で、それから徒歩で宇都宮の私塾に通っていたという。二度にわたって内之浦村の村長を勤めた久木元直哉もその一人であった。ちなみに、町誌は宇都宮の「伝書院」に学んだとしている。これが宇都宮の私塾の正式な名称であったかは確認できていない。

ただ、以上のことから宇都宮の私塾が高山を中心とした地域のきわめて重要な教育拠点であったことが分かるである

う。

ここで、宇都宮の学問観・教育理念を見てみたい。宇都宮の学問観は、安藤保氏も指摘しておられるが、門人は枝柳右衛門の弟で嗣子の茂兵衛に宛てて書き送った「遺訓」に見ることができる。柳右衛門は宇都宮の塾に入る際、宇都宮に対して「学文はわが好むところなれども、振商売にて渡世する者には不似合いの事にはあらずや」と問うた。これに対して宇都宮は「学問は只読書するのみでなく、日用の事にて商人なれば商業を勉励し、農人なれば農業を勉励し、父母に事え妻子を育て、各々その道を尽す事こそ真の学問である。才芸の如きは枝葉なり」と答え、柳右衛門はそれを信じて宇都宮の夜学に通うことになったという（『高山郷土誌』参照）。これを読む限り、宇都宮は学問を武士だけのものとは見ていなかったことが分かる。それゆえ柳右衛門のような商人出のものも受け入れられたのであるう。ちなみに、是枝柳右衛門が宇都宮の門人となる時期、契機、学んだ時間帯等に関して、諸書により違いが見られる。ここでは「遺訓」の記述に依拠するに留める。

また「東泊の漁場開拓の碑」に拠ると、宇都宮に碑文を委嘱した竹之下伊左衛門（東風泊の漁場を開拓した商人竹之下伊兵衛の孫）も宇都宮の門人であった。

東太の塾に関して曾孫の方は、「後輩の指導についても、漢

学・倫理・修身の道を説き知行合一の精神を打ち込んだ。(略) 寺子屋式の教場、勿論学制発布以前のことでもあるが、小学校ができてからも放課後特に漢学歌など習いにくる生徒もあった。／年齢は、一四、五歳の少年より二五、六歳の青壮年に至るまで思い通りに習いにきた。場所は住家の表一二畳の間、東太様その真ん中に箱火鉢を置き時々キセルをくわえ煙をくゆらしていた。子弟に読ませたり講義をされたり、教場は極めて厳格であった」とのべておられる。宇都宮は、寺子屋的な教育から、より専門的な教育までを行っていたのである。

塾は、少年を対象にしたものと青年を対象としたものがあったという。安藤氏に拠れば、前者は手習い(習字)が中心で、時に「小遠足・餅煮会・川狩りなど」も行われた。また、手習い児は士族の子弟が主であったが、若干ながら町人の子もいた。そして後者に対しては漢学の会読や講義を行ったという。一例を示そう。守屋舎人の日記の明治四年二月十九日の条に拠ると、守屋は子の八百右衛門(八歳頃)と孫の千加良(九歳頃)の手習い依頼のために宇都宮を訪ねている。

また、宇都宮の明治六年の日記の九月三十日の条に

内之浦謙介・日高亀千代其外式才の面々孟子講儀いたし呉候様二との事二而今日方相始候

とあり、二才(若者)たちの求めに応じて『孟子』の講義を始めている。時に宇都宮は五十六歳頃である。内之浦は宇都宮の実子で、内之浦家の養子となった人物で、時に二十六歳頃。同じく子の東之丞(時に二十一歳頃)も会読に参加している。すでに少年期に一通り読んでいたと思われる者たちが明治六年の段階で『孟子』の講義を願ったというのも興味深い。最初は会読・講義は不定期に行われていた。十月八日には野村伝之助も参加している。時に野村は三十代後半であり、翌七年には郷学が設けられて二等教授となっている。それに先んじて勉強し直そうとしたのであろうか。ちなみに安藤保氏に拠ると、野村は個人指導として『小学』から『大学』の講義も受けている。十一月十六日の会読からは、隔日に行うことに決められた。ただ、主だった者たちが不参の場合は、取り止められたりもしている。同じく安藤氏に拠ると、宇都宮の日記には七年六月十七日までは「二才之面々会読」、十九日からは「諸生之面々会読」と記されつつ、西南戦争の最中も会読は行われていたという。

三 神道家・国学者としての宇都宮東太

宇都宮東太の宗教・思想において大きな位置を占めたのは神道であった。それはたとえば、門人は枝柳右衛門の死後、その嗣子となった弟に与えた「遺訓」に「耶蘇教や一向宗に依よ

りも、皇国に生まれたる身としての葬祭は神道に従う事がよい」とのべているところに端的に表れているといえよう。ちなみに、ここでは仏教といわずに一向宗とのべているが、薩摩藩が一向宗に対して厳しい禁制政策をとったことと関連していると考えられる。宇都宮は郷士年寄の一人として一向宗取締りに関わっている。宇都宮はきわめて強い反仏教の徒であり、思想の根本のところに神道があったのである。

次に国学に関していうと、昭和四十一年版『高山郷土誌』は宇都宮正直が文武にわたって師事した人物の名を縷々列記しているものの、一人重要な人物が取り上げられていない。それは後醍醐院彦次郎真柱である。

後醍醐院真柱は、幕末から明治にかけての鹿児島における代表的な国学者の一人である。実の父の大河平隆棟も白尾国柱と並び称せられる国学者であった。後醍醐院は天保十年に平田篤胤に入門し、安政五年には造士館訓導師となり、国学を講じている。また、鹿児島における初期の廃仏毀釈運動を積極的に進めた人物としても知られている。著作に『神代三陵志』などがある。ちなみに、宇都宮が師事した造士館の山田鼎斎(有裕)と後醍醐院とは知友であった。

宇都宮と後醍醐院との交流がいつ・どのような形で始まったか、今のところ不明である。しかし、宇都宮が後醍醐院に師事し

ていたことは、後醍醐院良望編『後醍醐院真柱翁出廬事蹟実録』に宇都宮の「後醍醐院先生の京に赴くを送る詩並びに序」が収められていることによっても明らかであろう。後醍醐院真柱は明治政府において神祇官が再興されることになったことから、政府の御用召を蒙り、明治元年十一月に上洛することになったが、それを受けての作品である。その序において宇都宮はきわめて激しく仏教を批判している。この点で、宇都宮は廃仏毀釈を進めた後醍醐院の思想と一致していたといえよう。なお、黒田弥千代『幕末の志士 是枝柳右衛門』は、「東太先生は神仏儒を兼ねた学者であり」とのべ、上記『高山郷土誌』もまた「翁は神仏儒を兼ねた学者であり」とのべているが、仏教に関する知識はあったかもしれないものの、その激しい仏教批判の言葉を見る時、「神仏儒を兼ねた」と単純にはいえないのではないだろうか。

薩摩藩における廃仏毀釈の動きの背景には、幕末期に国学が隆盛となったことが指摘されている。代表的な人物は、後醍醐院真柱や田中頼庸らであった。

代表者の一人、後醍醐院と交流があり思想的にも共通点のあった宇都宮は、どのように高山における廃仏毀釈に関与していたのであろうか。宇都宮は日記を残しているが、この点に関してどのように記述しているのだろうか。残念ながら筆者は日記を目にしないので分からない。

ここでは宇都宮と関わりの深かった守屋舎人の『守屋舎人日帳』第十巻から後醍醐院の動向をみてみよう。

まず慶応三年二月二日の条によると、廃寺方御役の後醍醐院らは高山野崎の大塚大明神を拝見したり、高崇寺や昌林寺、御南様墓所や日新公関連の地等を参詣している。

三日は四十九所を参詣している。四日は雨で、一隊は二手に分かれ、一隊は中始良へ出立し、後醍醐院らは残留したが、五日には後醍醐院らも出立している。これに宇都宮が同行していたかは日記では確認できない。

次に慶応四年八月十一日の条によると、破寺方掛の後醍醐院らが再び始良（吾平のこと）から高山を訪れているが、宇都宮らが応対している。十八日には、後醍醐院らは野町を出立して波見浦へ行っている。

筆者の主観かもしれないが、後醍醐院の役職名は『自凝舎後醍醐真柱先生伝』では「寺院廃合掛」と呼称されていたものの、上記史料では、慶応三年には「破寺方」であったのが、翌四年には「破寺方」となっている。この呼称の変化は、そのままより強い廃仏毀釈の意志を表しているように思われる。

薩摩藩が進めた廃仏毀釈政策により、『鹿児島大百科事典』別冊に拠ると、高山にあった二十余りの寺が廃寺となっていた

る。高山における廃仏毀釈は、僧侶や門徒たちの抵抗もなくスムーズに行われたようである。守屋舎人の日帳に目を通して高山の人々が抵抗したような記述は見当たらない。

ちなみに、秀村選三氏は上記『日帳』の巻末の解題において「薩摩藩は廃仏毀釈を徹底的に遂行した藩として著名であるが、本巻には未だその点は余り出ていないが、神道御改正のことや郷内神社のすべて神号を改めるなど、神仏分離の方針は藩において積極的に進められていたのである」とのべるのみで、上記の後醍醐院らの調査および宇都宮の果たした役割については触れられていない。

明治政府は明治六年二月にキリスト教禁制の高札を撤廃し、同八年には布教自由を容認した。廃仏毀釈の嵐がとりわけ激しく吹き荒れた鹿児島であったが、全国に少し遅れて県も明治九年に「信仰の自由」を公認し、廃仏毀釈は終息に向かっていった。

宇都宮の国学者としての面を考える上で触れておきたいのは、後醍醐院の著作『神代三陵志』等に関わることである。後醍醐院は慶応三年八月に吾平山陵の調査を行っている。一方、宇都宮も大隅の神代・古代史に大いに関心を持っており、山陵のことも調べていたものと思われる。次のような詩がある。

国起西疆遠定東（国は西疆に起りて 遠く東を定む）

扶桑漸近日光紅（扶桑漸く近し 日光の紅なるに）

曾聞王業基茲地（曾て聞く 王業は茲の地に基づく）

嵩嶽鐘靈阿大雄（嵩嶽の鐘 靈阿大雄たり）

宇都宮と後醍醐院の間にいろいろと情報の交換があつたのではないかと推測したいところであるが、残念ながら現段階ではそれを裏付ける確たる史料がない。

明治六年七月のこと、政府の教部省大録の山之内時習（薩摩藩出身。造士館教授山之内作次郎貞奇の子）らが内之浦高屋・始良・鶴戸山陵の調査に訪れているが、宇都宮は立会役を命ぜられている。ただ、腫物が平癒していなかったため、十分な働きができなかった所もあつたようである。

幕末から明治初めには、大隅にある山陵についての該博な知識をもつた宇都宮のことは広く知られていたものと思われる。

ちなみに『内之浦町誌』に国見嶽への参詣道について「一八一四（文化一二）年九月、この参詣道入口附近に御陵道としるしとして鳥居建立の陳情が、高山郷士年寄宇都宮眞光院・同年寄助守屋弾正などから、御記録方添役白尾国柱・齊蔵に提出されている」とある。宇都宮東太の山陵に関する知識は、祖父・眞光院（眞光院）あたりからも引き継がれてきたのではないだろう。

か。

以上見てきた限りでも、宇都宮東太が神道家・国学者として高く評価されていたことが分かるであろう。

四 「宇都宮東太先生頌徳碑」の撰者二宮成について

宇都宮東太は明治三十九年（一九〇六）二月十七日、死去した。享年八十九であつた。そして明治四十一年（一九〇八）十二月十四日、宇都宮東太の頌徳碑建設竣工奉告祭が挙行された。その碑文「宇都宮東太先生頌徳碑」を撰したのは二宮成という人物であつた。碑文は竹之井敏先生の御厚意により本誌52号に掲載させていただいた。

最後に、本筋から外れるが、「宇都宮東太先生頌徳碑」の撰者二宮成について、簡単に紹介しておきたい。

二宮成は日置郡田布施郷（旧金峰町）の出身である。正確な生没年は今のところ不明である。父は千依（千頼とも）、母はフン。二宮家は、田布施神社の社家の家柄であつた。ただ、二宮成は分家筋であつた。はじめ金之助といい、のちに成と称し、号は岳南。

西南戦争が起こるや西郷方の兵卒として参加したが、途中

で帰順自首し、懲役一年の判決を受けた。時に年齢は「二十年十一月」であった。東京監獄署に収監された。

ちなみに、ずっと後の明治四十一年に二宮が撰した宮之城にある西南戦争戦没者のための「山崎村招魂碑」を見ると、二宮は碑文の最初に西南丁丑の乱（と記している）を想う毎に、その乱の基づく所を疑わずにはいられないというようなことをのべている。西南戦争とは何だったのか、自分の中で解決がつかず、後年まで迷い続けていたことが窺える。

芳即正氏に拠れば、明治十五年（一八八二）三月に河野主一郎を塾長とする教育機関の三州義塾設立が認可されたが、二宮は同盟員として関わっていたようである。

時期は不明だが、三重県伊勢市の神宮皇学館（明治十五年、初め神宮神官の子弟に皇学を研修させるために設立された）に学び、和漢の学を修めている。

その後帰郷して、警察に勤め、警部となる。その傍ら、積極的に政治活動に関わり、鹿児島市の後醍醐院良望や串木野の長谷場純孝、知覧の折田兼至らと行動を共にしたりしている。時に民権派の民党（反政府党）と保守派の吏党（政府党）が激しく対立していた時期にあつて、警官といえ、吏党とみられがちであつたが、二宮は民党であつた。たとえば、二宮は地元田布施村で吏党であつた時の村長を批判し、激しく対立したと

いう。

また『高山郷土誌』（一九六六）には、「吏党と民党の争い」として、宇都宮東太の日記の記述にもとづき、明治二十五年（一八九二）七月「折田兼志（至）、二宮成、後醍醐院良望、東太宅ヲ問フ」とある。頌徳碑に「予曾同折田後醍醐院游隅州、一夕相携訪先生於其廬（予は曾て折田・後醍醐院と共に隅州に遊び、一夕相携えて先生を其の廬（廬）に訪う）」とあることをのべているかと思われる。同じく東太日記に拠ると、宇都宮は「双方ノ競争甚シ、実ニ野蠻ト言フヘシ」とのべていて、当初は吏党と民党の激しい対立を苦々しいものと思つていたようである。しかし『鹿児島県政党史』に拠ると、宇都宮は訪ねてきた西郷菊次郎の勧誘を受けて吏党となつた。これにより高山は全体が吏党となつたという（ただ永井実功は民党の立場を貫いた）。『高山郷土誌』が、宇都宮を「吏党派の中核」であつたとしている所以であろう。なお、西郷菊次郎が宇都宮を訪ねたのは、東太日記に拠ると明治二十六年（一八九三）六月のことであつた。二宮らの宇都宮訪問はその前のことであることから、高山の政治的中心人物と見なされていた宇都宮を民党に引き入れることを目的としたものであつたかもしれないが、結果的にそれは失敗したといえるだろう。

明治二十七年（一八九四）三月、二宮は県會議員に當選している。しかし翌年には辞職したのではないかと思われる。

これも時期は不明だが、『金峰町郷土史』第二集に拠ると、二宮は鹿児島新聞社客員・漢詩の選者として活躍していた。

没年に関しても正確なところは不明であるが、二宮の大正五年（一九一六）八月撰の碑があり、『鹿児島県政党史』の大正七年（一九一八）の序に「故二宮成」とあることから、その間に亡くなったものと考えられる。

二宮の著書として『南朝順考論』（明治四十四年刊）、『田中頼庸先生』（手写、著述年不明）がある。上記『金峰町郷土史』第二集に「南北朝正統論ヲ著ス」とあるが、あるいは『南朝順考論』のことであろうか。後者の田中頼庸は幕末・明治期に活躍した鹿児島出身の国学者である。また中村一正『出水風土誌』に二宮の「大日本史と島津家系図」なる短文および渡部村雄なる人物の二宮宛書簡「丹後局に就て」が収められている。日本の歴史に造詣が深かったものと思われる。

確認できているところでは、串木野や宮之城、始良など県内各地に二宮成の撰文になる碑がいくつか残されている。その一つが鹿屋市高隈にある「故衆議院議員東君之碑」である。東君とは東一左右のことであり、二宮と親交があった。

おわりに

以上、幕末・明治期、高山郷の指導者であった宇都宮東太について、主に教育者としての面と神道家・国学者としての面を中心に簡単に紹介してきた。ただ宇都宮の全体像を明らかにすることはできなかった。特に宇都宮は明治政府が進めた諸政策をどう受け取っていたか、という点である。西南戦争では尊皇の面から政府を支持して西郷らの動きを批判したが、たとえば明治政府が認可した仏教やキリスト教等の信仰の自由の問題、また積極的な欧化政策の推進などを宇都宮はどう考えたのだろうか。

その他、たとえば文人（漢詩・和歌の作者）として高山地域の文化に果たした役割等についても論及することができなかった。

史料的に困難な面もあるが、今後も宇都宮の実像に少しでも迫っていききたいと思っている。